

人とつむぎ、織りなす日々のなかで

高齢期の発達

第8回 伝えられない想い

先月号のトシエさんは、大切な人との死別経験を友だちや職員に支えられながら過ごし、高齢期となつた今なお、ゆっくりと発達しています。支えられた経験の積み重ねが、トシエさんを次は支える人へと育てていくでしょう。そして、トシエさんの姿は周りの人たちにとつても、支えあうことの大切さを確かめさせていると感じています。

これまで、もみじ・あざみで暮らしているみなさんが、学習会や追悼会などを経験し、友だちと共に感しあう姿について紹介してきました。しかし、何十年も共に暮らし、同じように経験をしていても、大切な人の死と向き合うむずかしさは一人ひとりがちがいますし、その想いを表現してはいけないと感じている人や、すぐに表現できない人がいます。

さまだまな想い

もみじ・あざみにかかわり始めてから、少しづつですが、考え方のちがいをあらためて感じました。

個別におこなった聞き取りの結果は、3つの生活棟のうち、特に高齢化が進んでいたあざみ寮での老いや死に関する学習会につながっていますが、聞き取りで想いを語ることができたのは十数名と、もみじ・あざみで暮らすみなさんの2割にも至つていませんでした。語ることができなかつた人たちの想いをどのようにサポートしていくか模索しながら、老いや死に関する話題だけでなく、さまざまな想いを語ることができるように、散歩時や休憩時間、作業中など、日常のなかで話を聞き続けるように意識しました。そうして、個別の聞き取りで語らなかつた多くの人が、表現できない不安を感じていることをヒサシさんやノリエさんから教えられました。

ヒサシさんの想い

もみじ・あざみの3つの生活棟（もみじ男子・女子、あざみ）のうち、男子棟で暮らしていた40代のヒサシさんは、誰に対しても否定の言葉を使うことがない、陽気なおじさんといった印象でした。常に、職員には相手が誰であろうと「元気？」「男前やな！」と褒め言葉をかけ、簡単な会話を楽しむ姿もあつて、朝夕は施設前を通る地域の子どもたちに手を振つて「おはよう！」「お帰り！」と見送る人でした。

洗濯班でシーツのプレスなどに携わるしごとはほどほどにこなし、誰とでも同じ場所で活動することができ、視覚障害のある友だちや歩くことがむづかしくなつた友だちに手を差し伸べる姿がありました。ただ、自分の想いを周りに伝える

ことがなく、友だち関係が広がらないことが気がかりでした。50代となり年齢を重ね、時々ふさぎ込むような姿や苛立ちは見られるようになりますが、話しかけられるといつもの言葉を返していました。

そんなヒサシさんが60歳のころに、お兄さんが亡くなります。ヒサシさんの保護者として、帰省の送迎に来られるお兄さんです。葬儀に参列して帰寮した数日後に、主治医の面接がありました。近況を尋ねられたヒサシさんは、しばらく黙り込んだ後、突然立ち上がり椅子を激しく倒しながら「兄さん、死なはつた！」と叫んだそうです。あまりにも興奮した様子で、面接を終了するしかなかつたといいます。

その1週間後に、私はヒサシさんを個別の聞き取りに誘いますが、「いい！」と強く拒否します。ヒサシさんの様子を見ながら待つていた1ヵ月後、朝の散歩を一緒に歩いていたときに、お兄さんの話ではなく、何年も前に亡くなつたお母さんについて、自ら話し出しました。

短い言葉ではありますが、亡くなつた母に「会いたい」と話す、一人で泣いているけれども、「(泣くの)を」止めてくれない？」と求めます。ヒサシさんは話しながら、涙を流していますが、泣くことはいけないこととして、亡き母に会いたい思いをもちつつも、悲しみや寂しさを隠そうとしていたと考えられます。暮らしの場でも泣いている姿が見られていましたが、誰かに想いを伝えることはなかつたそうです。お母さんを亡くした悲しみを他人に語らなかつたヒサシさんにとつて、お兄さんとの死別は、抑えきれないほど大きな不安と喪



張 貞京

ちゃん ちよんきょん／京都文教短期大学准教授。共著に『保育者のためのコミュニケーション・ワークブック』(ナカニシヤ出版)。